一般選抜（後期日程）教育学部　小論文

1

【出題の意図】

問題文には岡田美智男氏の論考「コミュニケーションに埋め込まれた身体性――ロボット研究からのアプローチ」を用いた。本論考は『言語』(2008年6月号)」において企画された特集「コミュニケーションの身体性」に収録されたもので、コミュニケーションにおける「身体性」の機能とその認知メカニズムについて、認知科学を専門とする著者がロボット研究からアプローチしたものである。

コミュニケーションにおいて、身体は重要な情報発信源となる。ヒトはその情報をとらえ、解釈することで他者とのコミュニケーションを図っている。その仕組みについて、著者はヒトとコミュニケーション可能な他者としてのロボットの可能性を探究する中で、ロボットに求められる「身体」を論じている。結論として、ロボットは「私たちと同型な「身体」」を獲得すべきと述べているが、これは同時に、ヒトとヒトの間のコミュニケーションの成立基盤となる「身体」とはどういうものかということを示唆していると言える。

本問題では、まず「私たちと同型な「身体」」とはどういうものかを、著者の論を正しく理解し、それを適切にまとめることを求める（問1）。問2では、ヒトとロボットではなく、ヒトとヒト（人間同士）のコミュニケーションと身体との関わりについて論述することを求めた。上述したように、本論考から、ヒトとヒトの間のコミュニケーションの成立基盤となる「身体」に関する著者の考えを読み取ることができるが、それを参考に、人間同士のコミュニケーションと身体との関わりの特徴について受験生独自の例を挙げて論じてもらいたい。問2では、教育のベースとも言えるコミュニケーションについて、その本質を深く考察し、論理的に思考及び記述する態度と能力を問いたい。

2

【出題の意図】

出題文は、藤原辰史『縁食論：孤食と共食のあいだ』（ミシマ社，2020年）の第1章（一部改変）である。著者は、農業史・食の思想史を専門とする歴史学者である。ナチス・ドイツの農業政策に着目した独創的な研究に対して高い評価を得、『ナチス・ドイツの有機農業』や『ナチスのキッチン』などにより多数の学術賞を受賞している。

出題文が収められた『縁食論』は、ミシマ社の広報誌『ちゃぶ台』や『みんなのミシマガジン』などに連載されたエッセイをもとにしており、著者独自の「縁食」という概念から「あたらしい食のかたち」を提案する内容となっている。出題文は、孤食と共食をめぐる二項対立的な議論がいずれも共通した家族観や人間関係観を背景にしている点を指摘し、「子ども食堂」などの実践例とともに「縁食」の独自性を述べる部分である。しばらく前から、「ぼっち飯」など学生の食をめぐる人間関係が話題に上ってきたが、新型コロナウィルスのパンデミックを経験した近年では、集団で食事を摂ることそのものが大きく制限され、受験生にとっても「食のかたち」のあり様は身近な生活課題となっているだろう。

問は、著者の研究発表に対して、「公共の食堂は国家の手の届かないところを補完するだけであって、その原因となる貧困や労働条件の問題そのものの解決にはならない」という他の研究者からの批判を媒介にして構成されている。著者の考えに対する見解を述べるだけではなく、第三者の意見に対する自身の応答を考えることにより、著者が伝えようとしている「縁食」概念の本質についておさえながら、著者からも批判者からも一定の距離感を保った自身の見解を論述する力をみている。